

「文学国語」教科書題材紹介

文学の扉

山月記（中島敦）

高校国語教科書の定番となっている中島敦の名作を入門教材として配置。比較読解用文章として、典拠となった『人虎伝』も収録。

第一章

鍋セット（角田光代）

大学入学に合わせて一人暮らしをすることになった「私」に「母」がプレゼントしてくれたのは鍋セットだった。QR コンテンツでは、角田光代氏のインタビュー映像も視聴可能。

無用の人（原田マハ）

「父」の死後、「私」が受け取った「父」からの最後の贈り物。「父」が娘に伝えたかったものは何だったのか。心温まるハートフル小説。

ナイン（井上ひさし）

かつて新道少年野球団に所属した少年たちの現在は……。生徒の共感を呼ぶ内容として、教室での人気も高い作品。

三月の風（阿部昭）

心の中で父親は高校生の息子に向かってつぶやく。「馬鹿者め。やっぱりこのごまだ」。息子に対する父親の不器用な愛情が描かれる。

山椒魚（井伏鱒二）

岩屋の中から出られなくなった山椒魚は、蛙と一緒に閉じ込める。これまでも幾度となく教科書に掲載されてきた井伏鱒二の代表作。

水仙（太宰治）

主人公の「僕」は、菊池寛の小説『忠直卿行状記』に新たな解釈を試みる。比較読解用文章として菊池寛『忠直卿行状記』も収録。

こころ（夏目漱石）

「上 先生と私」や小説末尾も含めて掲載。作品全体の構造をとらえるとともに、「私」と「先生」の世代をこえたつながりを読み取る。また、漱石の時代認識を考察することができる『現代日本の開化』も合わせて収録。

物語のおわり（湊かなえ）

旅先で受け取った短編小説。その小説には結末が描かれていなかった。物語の結末を創作する活動（書くこと）にもつなげることができる作品。

源氏物語

『源氏物語』の原文（古文）とともに、与謝野晶子・谷崎潤一郎・角田光代による現代語訳を掲載。訳者による表現の違いを味わうことができる。また、橋本治による翻案小説『窠変源氏物語』も合わせて掲載。

文学のふるさと（坂口安吾）

自身も文学者だった坂口安吾は「文学」をどのように見ていたのか。「新戯作派（無頼派）」作家による不朽の文学論。

演技する「私」（安藤宏）

日本文学における「私」とはどのような存在なのか。日本文学の研究者が日本文学の表現の特徴を解きほぐす。

第二章

ひよこの眼（山田詠美）

その転校生の目を見たとき、なぜか懐かしく切ない感情に包まれた。少女の感性によって現代社会の問題に切り込んだ作品。

クリーム（村上春樹）

2020（令和2）年発行の『一人称単数』所収の一編。主人公「ぼく」は、「人生のクリーム」について思いを巡らせる。

赤い繭（安部公房）

帰る家がなく、しだいに自分がほどこけて空っぽの繭になる「おれ」。「シュールレアリスム（超現実主義）」の作家が織りなす不思議な物語。

野火（大岡昇平）

太平洋戦争前線のフィリピンで日本兵が直面する生と死の極限状況。人間の心理と無意識による行動がせめぎ合う様子を描いた戦争小説。

檸檬（梶井基次郎）

えたいの知れない不吉な塊に追われるように、みすばらしくて美しいものに惹かれる「私」。美に対する鋭敏な感覚で描かれた作品。本作の素案となった詩「秘やかな楽しみ」と、習作『瀬山の話』も合わせて収録。

件（内田百閒）

気がつくとき体が牛で顔だけが人間の化け物（件）に生まれ変わっていた「私」。百閒の師であった夏目漱石『夢十夜』の世界を彷彿させる幻想的な作品。

舞姫（森鷗外）

近代国家の建設が急がれた明治期の日本で、その担い手として期待された太田豊太郎。その豊太郎の「弱くふびんなる心」が引き起こす苦しみを描かれる。

掟の門前（フランツ・カフカ）

いつも開いている「掟の門」に入ることが許されない「男」。2,000字にも満たない本作品は、読者に多義的な解釈を許容する。

藤野先生（魯迅）

仙台医学専門学校で教えを請うた藤野源九郎との思い出を綴った自伝的短編。魯迅の小説集『呐喊』の巻頭に置かれた「自序」も合わせて掲載することで、「幻灯事件」が魯迅に与えた影響を考察する活動も提示。

父帰る（菊池寛）

二十年前に家族を捨てた父親が突然帰ってきた。ト書きや台詞など、小説とは異なる戯曲ならではの表現手法に触れることができる。